

採 蓮

Siren

第
三
号

No.23

目次

Contents

採蓮のいわれ 4

The Implication of "Siren" 5

図版 西川祐信「四季風俗図巻」 6

西川祐信筆「四季風俗図巻」考 北川博子 9

Study of Nishikawa Sakenobu's "Genre Scenes in the Four Seasons" Kitagawa Hiroko 19

平成三一／令和元（二〇一九）年度 千葉市美術館の活動 20

平成三一／令和元（二〇一九）年度 市民ギャラリー・いなげ 企画展および施設の利用者 48

Report on Transforming On-site, In-person Workshops Online Taguchi Yuka 54

会場集合型ワークショップの「オンライン化」についての報告 田口由佳 43

Doppo (Stand Alone) - Kitaaji Rosanjin's Pottery and the Renaissance of Modern Japanese Ceramics Warashina Hideya 41

獨歩 北大路魯山人の作陶と古典復興の時代 (1) 蘆科英也 2



東山での花見

水茶屋に集う



祇園町の盂蘭盆会

宮川町での座敷遊び



東山での松茸狩り



四条河原の夕涼み

鴨川での魚取り



東山での紅葉狩り

霊山での月見



角屋庭での雪遊び

角屋座敷での遊興

島原角屋の厨房

西川祐信筆「四季風俗図巻」考

北川博子

浮世絵は江戸を中心に語られることが多いが、一七世紀末から一八世紀半ばまで京都で活躍した西川祐信が重要な絵師であることに異論はないであろう。絵本を中心に膨大な数の作品を残し、後世の江戸の鈴木春信らにも影響を与えた。

四季折々の京都の遊興を描いた千葉市美術館所蔵「四季風俗図巻」は祐信の名品として、これまで多くの展覧会に出品されてきたが、全場面を詳細に読み解くことはなされてこなかった。本稿では全場面、描かれた人々の様子を詳細にみていくことで、この絵巻の意義を改めて考えていきたい。

一、西川祐信という絵師

西川祐信は京都で活躍した浮世絵師である。寛文一二年（一六七二）に生まれ、当時としては長寿を全うして寛延三年（一七五〇）七月一九日に没した。画業の初めは、元禄一二（一六九九）年に京都の版元、八文字屋八左衛門から刊行された役者評判記『役者口三味線』の挿絵とされている。当時の八文字屋は役者評判記や浮世草子といった、時流に乗った新しい出版物を手掛けていた版元であった。祐信はその版元の挿絵画家として腕を磨いていったのである。

初期の版本として特筆すべきは着物の「雛形本」であろう。半丁に一図、図柄がわかるように、小袖を背面から描いた雛形本は、当時のファッション誌の役割があった。祐信の作品としては、正徳三年（一七一三）刊『正徳ひな形』、

享保三年（一七一八）刊『西川ひな形』、同七年刊『享保ひな形』などがある。こういった雛形本を得意としたからこそ、祐信が描く女性たちは洗練された柄の着物を着しているのである。

祐信は「女性画家」とも賞され、多くの女性を絵本に描いたが、その中でも享保八年刊『百人女郎品定』は様々な階級や職業の女性の姿を描いており、祐信絵本の中でも評価が極めて高い。女帝・皇女・皇后から始まり、夜の水茶屋の女性二人と、惣嫁と夜鷹といった、道端で客を引く最下級の街娼で終わる。女帝から夜鷹まで、幅広い女性が描かれているのだが、その女性たちが生き生きと、また着物の柄も詳細に描かれていることが特徴で、雛形本を得意とした女性画家の面目躍如たるものがある。

なお、祐信は後の浮世絵のような一枚物は手掛けていない。今日、時々報告される祐信の一枚物は、折本である『西川筆の海』や『西川筆の山』（何れも享保中期頃刊）などから外れたものである。

さらに祐信には、「柱時計美人図」（東京国立博物館所蔵）や「衣通姫図」（京都府所蔵、京都文化博物館管理）をはじめとする、肉筆画の秀作も数多く残っている。

二、もう一つの「四季風俗図巻」

祐信には「四季風俗図巻」という名を持つ卷子本が二作品確認できる。一つ

は本稿で取り上げる千葉市美術館所蔵本、もう一つはボストン美術館所蔵本である。ボストン美術館所蔵本は展覧会図録『ボストン美術館所蔵 肉筆浮世絵展 江戸の誘惑』(二〇〇六年、朝日新聞社刊)に作品番号2として全図と浅野秀剛氏の解説が掲載され、ボストン美術館のHPからも画像の閲覧が可能である(<https://collections.mfa.org/objects/26563>)。氏の解説には「西川祐信の肉筆画は相当数遺存しているが、春画巻以外の卷子本で現在確認されているのは本巻と千葉市美術館蔵「四季風俗図巻」(以下、「千葉本」という)のみである」とあり、肉筆画を得意とした祐信の中でも、卷子本が珍しいことがわかる。

この二点、同じ作品名を持ちながら、内容はかなり異なっている。先にボストン美術館本の概要を述べることで、千葉市美術館本の特徴が理解されると思うので、簡単に紹介しておきたい。

まず、書誌を記す。紙本着色一卷。寸法は縦三二・六センチ、横五四五・二センチ。巻末に落款「西川右京祐信画之」と、朱文方印「西川氏」、白文方印「祐信図之」の印章がある。春夏秋冬それぞれ二図ずつ、計八図が収録されている。八図の概要は次の通りである。

- 第一図 座敷での正月風景。カルタに興じる女性三人と若衆一人。
 - 第二図 野外での花見。幕を張り、緋毛氈の上で三味線や飲食を楽しむ女性五人。
 - 第三図 野外の散策。時鳥が飛び、卯の花が咲く道を歩む女性四人。
 - 第四図 野外の涼み。川端の柳の下、床几に腰掛ける女性二人。
 - 第五図 縁側と座敷での七夕。七夕飾りの前で三味線や琴を楽しむ女性三人。
 - 第六図 座敷での月見。和歌(もしくは俳諧)を楽しむ女性三人。
 - 第七図 座敷での語らい。炬燵を囲んで百物語を楽しむ若衆一人と女性三人。
- 〔「百物語」は夏の季語でもあり、若衆が持つ灯心以外「百物語」を連

想するものはないが、他に特定することができないため、浅野氏の説に従う)

第八図 庭での雪遊び。座敷や縁側から眺める女性二人と庭で雪遊びする若衆一人。

浅野氏の解説に「春夏秋冬に配されたそれぞれの二図は、全く別の場面とみてよいが、一見すると一続きの場面のように構成した手腕は評価されてよい」とあるように、卷子本として場面のゆるやかな繋がりはあるものの、場面ごとの独立性が高い。また、若衆もいるが、基本的に登場するのは女性で、女性二十五人、若衆三人が描かれているのである。四季を彩る小道具も、女性たちの着物の柄も、かなり細かく描き込んでいる。つまり、四季それぞれの女性の風俗を描いた絵巻といえよう。

三、千葉市美術館所蔵「四季風俗図巻」

浅野氏はボストン美術館所蔵本と千葉市美術館所蔵本を比較して、次のように述べられている。

同じ四季風俗という主題であり、七夕の合奏の二女が千葉本の納涼の合奏の二女に姿形が極似し、千葉本にも耳を引っ張る女性が描かれているなど共通点多く認められるものの、その描画姿勢にはかなりの隔たりがあることに気づかされる。千葉本が、登場する男性の数も多く、実態に近い四季風俗となっているのに対し、ボストン本は女性を中心に若い男性を三人だけ加えた構成となっており、人物を大きく造形している点、千葉本が秋風俗を他の季節の倍の長さにしてしているのに対し、ボストン本は四季が四等分されている点などである。二種の四季風俗図巻は、祐信の風俗図巻の

二つの側面を代表するものといえるであろう。

それでは、千葉市美術館所蔵本をみていくことにしたい。まずは書誌を記す。紙本着色一巻。寸法は縦三三・〇センチ、横六三七・五センチ、巻頭に朱文長方印「文華堂」の印章、巻末に落款「西川右京祐信筆」と、朱文方印「西川氏」、白文方印「祐信図之」の印章がある。画風からボストン美術館本同様、享保期（七一六～三六）頃の作品と考えられている。

浅野氏の解説にあるように、千葉市美術館所蔵本は登場人物が多く、総勢一〇人である。絵巻の横の寸法がボストン美術館より約九〇センチ長い、それにしても描かれている人物の数はかなり多い。春は花見、夏は鴨川での魚取りや床での宴、それを座敷から眺める様子、秋は盂蘭盆会や月見、紅葉狩り、松茸狩り、冬は揚屋での料理作りや宴席、雪遊びが描かれていて、四季が連続と続いていく構成となっている。また、描かれている場面も、ボストン美術館所蔵本のように漠然とした座敷や野外ではない。後述するように、場所を特定できる場面が多いのである。千葉市美術館所蔵本は、四季それぞれの京都における遊興を、楽しむ側はもちろん、そこで働く男女の様子を詳細に描き込んでいる点が大きな相違点である。

四、春夏秋冬、それぞれの遊興

それでは、実際に千葉市美術館所蔵「四季風俗図巻」を、六頁、七頁に見開き三段で掲載されているカラー図版の場面ごとに見ていくことにしよう。

水茶屋に集う

巻頭は春、桜の木の下に設営された水茶屋の風景が始まる。水茶屋とは、湯茶を飲ませて往來の人を休憩させた店であるが、描かれた店の作りは簡略で、

花見や紅葉狩りの季節にだけ出すのかもしれない。次の場面が東山らしいことから、ここも同様に考えておきたい。

二人の女性が簾を上げたり、緋毛氈を敷いたりと開店の準備に忙しい。こうした開店準備を絵巻の始まりに重ねるのも趣向の一つであろう。水茶屋は山に登ってきた花見客が最初にたどり着き、咽を潤し甘味を求める場所である。

黒の被^きを頭から覆っているのは町家の内儀、笠を被った振り袖姿はその娘といところであろうか。二人の間にいて、娘を手招きしている女性と、後方、盲人の手を引いている女性は供の女中であろう。内儀は洗めの葡萄^{えびちや}茶色、若い娘は赤の振り袖、前方の女中は金茶の地に縞模様、後方の女中は灰色がかった青地に白で模様が染められている着物である。本絵巻では、付き添う女中や座敷などで働く仲居たちは、この場のように、金茶地に縞や格子、灰青地に白の模様といった地味な着物を着ている。同じ女性でも身分の違いを着物で描き分けているのは、『百人女郎品定』や雛形本を手掛けた祐信ならではの手腕といえるだろう。

東山での花見

花見の場面を東山と特定した理由は、延宝四年（一六七六）刊『俳諧類船集』巻五「幕^{まく}」の項の記述「東山の桜のさかりには春風に幕のひらめく折から」に拠る。もちろん、東山以外でも同様の花見は催されたであろうが、東山の花見幕は特に有名だったようである。さらに、後述するように夏から秋の場面も鴨川、東山となっているようなので、春の場面も東山としておきたい。

幕の右側に見える男衆たちは宴に必要な酒肴を用意している。左に立つ男性は酒樽を運び、右にしゃがむ男は扇で火を熾している。野燐^{のろう}炉には酒鐙^{しやう}やとつくりなどは見えないが、ここで酒を温め、横に置いている丸い網で食材をあぶって出すのであろう。背後に置かれている荷物箱は、幕や食器・酒器などが入

れられていたと思われるが、かなりの量である。幕の内にも大きな箱が置かれている。こちらは箱の上の風呂敷とともに、舞妓や芸妓の持ち物かもしれない。屋外とはいえ大がかりな酒席である。

それでは、幕の内側を覗いてみよう。扇をかざし振り袖姿で舞っているのは舞妓、手前で三味線を弾くのは芸妓である。花街の芸妓や舞妓たちは、客の要望に応じて、屋外へも出向いていったことがわかる。舞妓の正面、頭に手を置くのがこの座の主人、その右隣が娘、手前に打ち掛け姿で背中の上部だけが見える横顔の女性が内儀であろう。その右側でも、総髪 of 男性が杯を持つ客と話をし、手前の女性が箸で肴を取り分けている。漆の重箱、朱塗りの盃、細工のある煙草盆など、かなり高価そうである。屋外の宴会を彩るこれらの小道具からも屋外での食を楽しむ人々の様子が見て取れる。

幕の内から聞こえる三味線の音に惹かれてか、中を覗く二人の男性がいる。一方、幕内から外を通る女性たちを眺める男性たちもいる。この二人は風貌も若く、笠を被り、桃色の着物を着た若き女性をはじめとする三人を見つめている。風貌や着物で年齢を描き分けているため、それぞれの行為の意味がよく理解できる。

ボストン美術館所蔵本にも幕を廻らしての花見図はあるが、女性ばかりでもあり、どこか現実味に欠けている。本図はそうした意味でも、当時の花見の様子を活写していると思われるのである。

鴨川での魚取り

季節は夏へと移る。川の中に入っている三人のうち、手前の二人は縄を持っているが、縄にくくりつけられているのは葉のついた枝のようである。枝ではなく糸が括り付けられていれば、水中に釣り針をたらず「延縄」の可能性もある。しかし、葉が見えていることから、二人が縄を引いて枝葉で水中の魚を前

方へ追いやり、その魚を叉手さこを持つ男性がすくい取るのであろう。つまり三人が組んで魚を捕っているのである。また、岸から竿で魚を釣っている若衆もいる。この四人も、勝手に魚を釣っているわけではない。河原の床几には刀や羽織などが置かれているので、店を通しての川遊びだとわかる。柳の木の下には酒樽が、床几の上には酒器が用意されている。床几の前で、釣った魚を入れる盥う意いする女性二人もいて、その右の女性はかんでき（七輪）で魚を焼いている。つまり、自分たちが釣った魚をその場で焼いて酒と共に楽しむ、という趣向の店なのであろう。

四条河原の夕涼み

「床」は現在まで続く京都の夏の風物詩で、今は川の西側の店が出しているが、安永九年（一七八〇）刊『都名所図会』巻二には「六月七日より始り同十八日に終る 東西の青楼せいろうよりは川辺に床ゆかを儲もけ 燈とうは星の如く 河原かはらには床机とこぎをつらねて」とあり、その様子が挿絵に描かれている。この挿絵と寛政十一年（一七九九）刊『都林泉名勝図会』巻一の挿絵では、建物に直結した床と河原に設置された床が描かれており、本絵巻のように川の中に床が造られてはいない。しかし、宝永元年（一七〇四）刊『華洛細見図』巻六（図一）には、川の中に造られた床が六つ描かれ、『都名所図会』同様「六月七日より十八日迄四条川原すゝみあり」と説明されている。『華洛細見図』は本絵巻の制作時期と近く、この頃の床は、このように川の中に造設されていたことがわかる。

さて、床の上の様子に目を向けてみよう。主客と思われる黒羽織の男性が舞妓に酒を無理強いし、剃髪の男性が扇で煽あおっているように見える。四条河原近くには寺が多いので、僧侶である可能性もあるが、元禄三年（一六九〇）刊『人倫訓蒙図彙』には剃髪の職業として、学者、医師、針師、茶湯者などが描かれており、何れの可能性もある。嫌がる舞妓を見て取りなすのは店の仲居である



図1 『華洛細見図』巻六(国立国会図書館所蔵 ウェブサイトより転載)

うか。手前では男性客と芸妓が「拳遊び」に興じる。拳遊びとは、二人が互いに指を折り、数を示していく、酒宴での遊興である。

カラー図版では中段となるが、画面左から川の中を床に近づく少年が描かれている。手にする箱には何が入っているのか、どうした用事なのかは不明だが、この席に届け物をする「働く少年」であることは、その着物の様子からも見て取れる。その左にたたずむ一羽の鷺も鴨川の風情に一興を添えている。

この床の場も、酒器や料理を盛る器、煙草盆などの小道具が丁寧に描かれて

いる。朱塗り、蒔絵の模様、白磁の器から、酒や肴を楽しむ用具の発達を見て取ることができる。

宮川町での座敷遊び

鴨川東側に面する座敷の宴席を描いているので、花街の一つ宮川町と思われる。右で鴨川を眺める男女は客と芸妓であろう。それぞれ団扇と扇子を持ち、夕涼みの体である。琴を弾く芸妓と三味線を弾く振袖姿の舞妓を愛でているのは、右手を上げる客で、横で寝そべる若い剃髪の男性はくつろいで外を眺めている。仲居が持つ酒鎗も意匠を凝らしたものである。部屋には碁盤と碁石も置かれ、花街の遊興の多様性を垣間見ることができる。

祇園町の盃盆会

季節は夏から初秋へと移る。絵巻の構成上、建物が続いているように見えるが、ここからは別の場所である。芸妓や舞妓が描かれていることから、宮川町からほど近い花街、祇園町と思われる。盃盆会、いわゆる「お盆」は、現在では夏の行事と思われがちだが、江戸時代には旧暦七月十五日、暦の上では秋の行事であった。本来、供物をそなえて祖先の霊を迎え、経をあげる仏事であるが、盆踊りをはじめ、庶民の娯楽でもあった。

画面に目を向けると、庭の木の枝からお盆の切子灯籠が吊されている。床几の上には音頭取りが扇をかざし、場を盛り上げている。その周囲を芸妓や舞妓、男衆たちが踊っている。今の盆踊りとは異なり、振りは各自思うが儘のようである。思い思いに踊りに興じる様子からは、音曲が聞こえてくるようでもある。

座敷から盆踊りを眺めているのは、芸妓と舞妓、そして客たちである。奥に正座している人物は顔が隠れているが、灰青色の無地の着物に女性用の広めの

帯をしているので座で控える仲居であろう。この座の主客は脇息でくつろぐ男性で、剃髪の人物と共に盆踊りを見物している。こうした盆踊りも、花街の一興となり得たのである。

霊山での月見

前の場面と同じ家屋のように見えるが、これも絵巻の構成上の虚構である。季節はさらに進み、空に浮かぶ満月から、旧暦八月十五日の仲秋の名月とわかる。貸座敷で催された句会の様子を描いているようである。江戸時代の京都の大寺院には塔頭があり、各塔頭は貸座敷を営んで、そこでは詩歌が催され、歌舞を伴う酒宴も開かれていた。塔頭としては円山安養寺の六阿弥(勝興庵正阿弥、長寿庵左阿弥、花洛庵重阿弥、多福庵也阿弥、延寿庵連阿弥、多蔵庵源阿弥)が有名であるが、霊山山頂にある正法寺にも多くの塔頭があった。安永九年(一七八〇)刊『都名所図会』巻三にも次のような記載がある。

当山^{とうざん}の坊舎^{ぼうしゃ}はみなく絶景^{せつけい}なり 洛陽^{らくやう}の万戸^{ばんこ} 鴨川^{かもがは} 大井川^{おおいがは}の二流^{にりう}
愛宕山^{あたご} あらしの峰々^{みね々} 淀^{よど} 山崎^{やまざき}の通船^{つうせん}まで 書院^{しよゐん}より坐^をにして眼^めの下^{した}
に遮^{さか}る 洛中^{らくちゆう}の集会^{しうかい} 遊筵^{ゆうえん}は此院^{このいん}々^々を借りて饗^{きやう}応^{おう}す

『都名所図会』には挿絵がないが、絵巻に描かれた座敷と遠景の様子が、『都林泉名勝図会』巻二の挿絵「霊山叔阿弥」(図2)に似通っている。挿絵上部、綴じ目をまたいで描かれている座敷から左へ広がる眺望である。なお、安養寺の塔頭は『都林泉名勝図会』の挿絵に描かれているのだが、庭や建物が立派すぎず本図と風情が違う。もちろん、描かれた時期が違いため建物の建て替えは考えられるが、眺望の様子が合致しない。本図に一番、似通っているのが霊山の叔阿弥なのである。

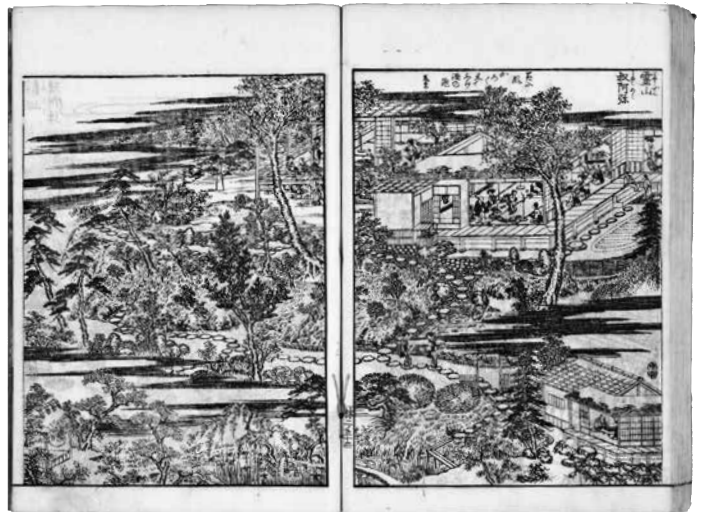


図2 『都林泉名勝図会』巻二(京都大学附属図書館所蔵)

絵巻の画面の様子は俳諧の場と思われる。右奥、剃髪の人物が、句の評点を行う俳諧師であろう。その左側の女性は自身の句を書いた料紙をたんで渡しており、斜め向かいの振り袖姿の娘は句を書いた料紙を持ちながらも、俳諧師に猶予をお願いするような仕草をしている。縁側に近いところに座す男女は、すでに句作を終えているのであろうか。月と雁といった秋の風情を眺めている。二人の手前に控えている女性は灰色がかった地味な着物を着て、手前に酒罎を置いていることから、塔頭の仲居と考えられる。すでに盃も置かれてお

り、これから文芸の世界から酒宴へと移るのであろう。

東山での紅葉狩り

さらに秋が深まり、山野で紅葉を鑑賞する季節となる。この場合は幕を張り、緋毛氈を敷いての紅葉狩りを描いている。前場面が霊山とすると、ここも花見同様、東山あたりであろうか。春の花見の心弾むような華やかさとは異なる、穏やかな雰囲気か漂う。真ん中に置かれた重箱は金の蒔絵が施された漆器で、宴席に馴染みの盃や盆も置かれている。興味深いのは、紅葉の枝から自在鉤で酒鐙をつるし、落ち葉を燃やして酒を温めていることである。竹と鉤から成り、囲炉裏で使われることの多い自在鉤は、こうして屋外でも利用されていたのであろう。

なお、ボストン美術館には、落款「西川右京祐信筆」、朱文方印「西川氏」、白文方印「祐信図之」の印章を持つ「紅葉狩図」(<https://collections.mfa.org/objects/26566>)が所蔵されている。構図や人物表現がこの場面に酷似していて、本絵巻からの借用は明らかであるが、落款の書体と紅葉の葉の描写に違いもあり、祐信作とするには慎重を要する。しかし、本絵巻の享受のあり方としては興味深い作品といえよう。

東山での松茸狩り

前場面から繋がるように四人の人物が描かれている。一人は紅葉狩りを楽しむ人たちに合図を送り、松茸狩りの様子を知らせているのであろう。四人の左に描かれた薄や萩、手前の竜胆といった秋草が写実的に描かれている。

笠を被るのは母親、母の手を取るののは振り袖姿の娘、山に分け入り松茸を取っているのは、男児と父親のようである。一緒に松茸を探しているのは、金茶地に格子柄の着物であることから、この家に仕える女中であらう。

京都は山に囲まれた盆地なので、当時はそれらの山々で松茸狩りが行われていた。『都名所図会』巻四の松尾社の記事の間にも松茸狩りの挿絵がある。また、伏見稲荷大社の稲荷山も松茸の産地として有名であったが、この山は幕府直轄の地で、京都所司代に納められる「献上御用松茸」が採取されていた。直轄地として松茸を管理していた様子は、『朱』編集部「稲荷山の松茸と幕府役人の増産への執心 附・目代信資『文政七年 富山松茸取雑記』」(一九九四年、「朱」第三七号)に詳しい。具体的な献上量の多さに驚かされるが、幕府直轄地であるため、公然と庶民が松茸狩りを楽しむことはできなかったのである。

江戸時代中期の随筆家で歴史家、俳人でもあった神沢杜口著、安永五年(一七七六)序の随筆『翁草』には、太閤秀吉と松茸狩りの逸話が次のように記されている。

『翁草』巻八十三「太閤松茸山に遊ばれし事」

太閤秀吉公の御時、秋の頃、東山松茸多く出候由被聞召、近日に東山へ可被為成間、脇より取不申様にと仰出されけるに、早先達て洛の者共いり込、残さなく取たる跡なれば、無詮方奉行衆方々の山々より松茸を取寄せ、一夜の内に植させける。斯て太閤成らせられ、女中衆も多く被召連、松茸上覧、御自身も被為取、御機嫌不斜。然るに植えたる松茸なれば、自ら生えたととは格別違ひけるを、太閤の知らせ給はぬを、女中衆囁笑て、面々さへ是を知るに、さしもの御名將の御存無きこそ可笑けれど、或さになき女中卒度此由を申上るに、秀吉公笑せ給ひ、などか夫を知らざらん、だまれくと被仰、其の後かの女中は、御気色に違はれしと。名將の寛宥たる事、尤もさも有べき事か。

(国立国会図書館デジタルアーカイブ 一九〇五年、五車楼書店刊『翁草』より)

祐信の絵巻より百年以上昔、秀吉の太閤時代の逸話である。秀吉の度量の広さを示す逸話であるが、この記事からも、東山が洛中の人たちの松茸狩りの場となっていたことが理解できる。周囲を山に囲まれていた京都ではあるが、春から秋までの流れから、絵巻の松茸狩りの場面も東山辺りの様子を描いたものとしておきたい。

島原角屋の厨房

本絵巻もいよいよ冬の終章となる。冬については建物から庭まで一続きの場面である。『都林泉名勝図会』巻五には、大門辺りを描いた「島原花寄」と三つの揚屋の様子を描いた「同所 京屋弥生興」「同所 藤屋月興」「同所 角屋雪興」(図3)の挿絵が載る。廓では遊女屋から遊女を呼び寄せ、揚屋で客と酒宴を催した。揚屋は料理屋の側面もあったが、歌舞音曲の場、文芸の場であり、文化を育む場所となっていた。『都林泉名勝図会』の三図は、そうした様子がかがえる挿絵であるが、このうちの角屋の雪景色を描いた挿絵が、本絵巻の座敷、庭とほぼ一致している。

島原は江戸の吉原、大坂の新町と並ぶ官許の廓であった。江戸時代中期以降、便の良さもあって四条河原周辺の花街が繁栄していくが、官許の廓である島原は祇園町などより格上であった。廓は文化の中心でもあり、祐信も『百人女郎品定』下巻で、京島原の女性たちを見開き三図に描いている。そこには、「太夫」「新造」「引船」「遣り手」「禿」「局女郎」「鹿恋」「小天神」「花車」「大天神」「轡の女房」「端女郎」といった女性たちが登場する。遊女の格の違いが描き分けられており、格式の順は太夫、天神、鹿恋で、局女郎や端女郎は下級の遊女である。禿は上位の遊女に仕えて見習いをする少女で、新造は勤め始めたばかりの若い見習い遊女のことである。

なお、本絵巻と『都林泉名勝図会』とでは、建物や雪景色の様子は一致して

いるものの、遊女たちの衣装や髪型が違っている。『都林泉名勝図会』の遊女たちは髪を豊かに結い上げ、櫛、笄、簪などのたくさんの髪飾りを差していて、大きな前帯やゆつたりとした打ち掛けを着し、総じて豪華になっているのである。対して、本絵巻の遊女たちにはそれほど豪華さはない。もちろん『百人女郎品定』の島原の遊女たちの姿とは一致している。時代と共に豪華さが増していく様子が『都林泉名勝図会』からは見て取れるのである。

まずは料理屋の側面も持ち合わせていた、揚屋の厨房からみていこう。画面

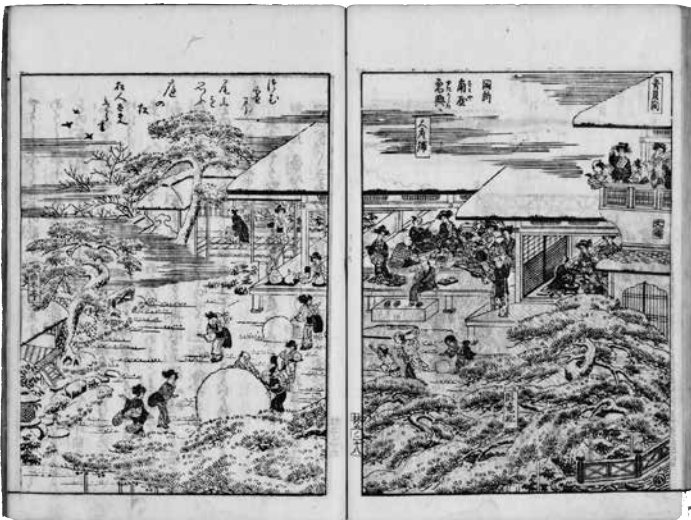


図3 『都林泉名勝図会』巻五(京都大学附属図書館所蔵)

手前、水はけを良くするために敷かれた竹の簀の子で料理が行われている。左側に作られた棚には調理用具や食材が整然と並べられている。その横で鯛をさばく料理人は、室町時代後期に成立し、江戸時代には多数の写本と版本で図柄が知られた『七十一番職人歌合』の「五十七番 包丁師」と同じ手さばきである。つまり、まな板の上の鯛に直接手を触れず、包丁と真魚箸を用いて料理をしている。なお、江戸の菱川師宣の延宝六年（一六七八）刊の絵本『吉原窓の道引』や天和（一六八一〜八四）頃の十二枚組「よしわらの体」の一枚、そして、菱川派の『江戸四季風俗図巻』（ポストン美術館所蔵）には吉原の厨房が描かれている。『江戸四季風俗図巻』の厨房はかなり大きく働く人の数も多い。これらに描かれた吉原の包丁師は簀の子の上ではなく、一段高い畳のところに羽織を着し、本絵巻と同じ方法で魚をさばいている。対して、本絵巻の包丁師は羽織を着さず、労働着である軽衫袴姿である。江戸ほど格式張っていない様子が見て取れるが、脇に置く包丁は四本あり、さばく食材によって包丁を変えていたことがわかる。

庖丁師の右、尻絡げの男性が盥で洗っているのは、羽をむしられた鳥である。正徳四年（二七一四）刊、四条高島撰『節用料理大全』には、時には江戸との対比も交えながら、京都で食される鳥類の解説が施されている。「諸鳥人数分料理」は九三種ものの鳥の特性と、一羽からどれだけの人数分の料理（主として汁物）が作れるのかを説明している。江戸との対比もあり、京都の特性がよくわかる。鳥の説明に続き、その料理法である「塩鳥」「鶏飯」「南蛮料理」「雉子飯」の解説や、「鳥料理献立之事」も掲載されている。京都の高級料理のあり方を示す解説本であるが、本書を見ていると、逆にこの絵巻に描かれた鳥の種類を見極めるのが難しくなる。季節柄、鴨か雉子といったところであろうか。座して調理をする男衆は前掛けの女中に鍋を持って来るよう、手で合図をしている。これから火にかけて調理を始めるのであろう。

一番奥では酒の燗をしている様子が描かれ、手前の若い仲居に気軽に声をかけている男性が見える。こうした場所で、炬燵に入り、煙管で煙草を吸えるのは、揚屋の亭主といったところであろうか。女中が手慣れた様子で炬燵に炭を入れている。お茶を出すように言われているのか、男児が後ろを気遣いつつ、座敷へ向かっている。この男児も働く少年といえるであろう。

角屋座敷での遊戯

続いて座敷の酒宴を見ておこう。向かつて右の男性客は厨房に向かつて手を叩いている。男児の運ぶ茶を所望しているのか、更なる酒肴を所望しているのか。真ん中で口到手を添えながら笑っているのが島原遊女の最高位「太夫」であろう。豪華な織りの打ち掛けを着している。背後の屏風も金地で、島原らしい格の高さを見ることができている。

火鉢の横で、頭巾を被り座っているのが廊の上客である大尽であろう。大尽の正面に座す男性は遊女から「耳引き」をされている。「耳引き」とは勝負事に負けた人の耳を罰として引く張ることである。振り袖姿の新造に酒を勧められているので、酒の飲み比べか何かであろうか。ちなみに、「耳引き」はポストン美術館所蔵本の冬の場面にも描かれているが、こちらは火種を持った若衆に対して行われ、酒宴とは無関係である。耳引きされている客は顔がにやけ、楽しそうな雰囲気である。太夫の背後には膳の上に料理も置かれている。宮川町や祇園町あたりと比較すると格上の座敷である。

廊下から剃髪の男性が差し出すのは、盆に盛った雪である。雪も酒席の興となり得たのであろう。

角屋庭での雪遊び

庭では三人の女性たちが雪合戦の真最中である。狙いを定め真剣に雪の玉を

投げている女性は灰青地の着物、転びながら逃げている女性は茶色地に格子柄の着物である。これらの着物から見て揚屋の女中ないし仲居といったところであろう。雪の玉を抱えながら手に息を吹きかけて温めているのは、振り袖姿なので新造と思われる。女性たちによる雪合戦が生き生きと描かれているが、これは個人的な遊び、というより、座敷から庭を見物する客たちに供されたものと考えられる。背後に大きく丸められた雪も、木々に積もった雪も、冬の風物詩である。その様子を窓から覗くのは仲居、太夫、客の三人で、客は笑顔で庭を指さしている。座敷内にとどまらない揚屋での賑やかな遊興は『都林泉名勝図会』の時代へと受け継がれていった。

本絵巻は鴨川以東、東山界限を描いている場面が多いように見受けられるが、最後は島原で締めくくられている。角屋の雪景色が有名であったこともその理由であろうが、美人画の名手として島原の遊女を数多く描いた祐信の絵巻だからこそ、最後を島原で飾ったのではないだろうか。

五、絵巻から読み取れるもの

以上、絵巻に描かれた一一〇人による春夏秋冬の遊興を見てきた。女性たちは着物の打ち掛けの有無、色や柄などで年齢や職業、身分の違いが示されていた。また男女ともに顔の老若もきちんと描き分けられているのである。

西川祐信は享保一六年（一七三二）刊の『絵本常盤草』中巻でも、女性たちが月見や花見などに興じている様を描いているが、こちらはあくまでも「女性の姿」に主眼がある。対して本絵巻では、座敷や野外での遊興ばかりではなく、採取自体を楽しむ魚取りや松茸狩りも描かれている。食を彩る食器なども意匠を凝らしており、こうした娯楽が文化であったことが理解できるのである。さらに、本絵巻は娯楽に興じる人たちがばかりではなく、そこで働く人々の姿も生き生きと描いていることに注目しておきたい。

また、本絵巻の場面については、具体的な場所を想定して描かれていることを示せたかと思う。祐信が活躍する少し前に、江戸の菱川師宣は江戸の遊興を絵巻に仕立てた。工房作も含めるとかなりたくさんさんの作例を見出すことができる。それらは、近世に入って造営された江戸の町の「今」を楽しむ人々の姿を描き留めたものである。本絵巻は江戸の師宣絵巻の存在を知っていた依頼主からの要望で作成されたように思えるが、本作以外に祐信がこうした肉筆画を描いた例を現時点では確認できていない。今日からみると、京都で生まれ育った祐信だからこそ描けた名作だと思えるが、当時の京都ではこうした肉筆画は主流とはならなかった。少し残念な気もするが、だからこそ、本絵巻の魅力が際立ち、京都の浮世絵としての存在意義を見出すことができるともいえよう。

（きたがわ ひろこ 甲南女子大学非常勤講師）

「付記」

「島原角屋の厨房」で炬燵に入る男性については、当初、常連客ではと考えていた。その後、藤原英城氏に「揚屋の亭主」の可能性を示唆され、本稿ではそちらを採用させていただいた。このように一人一人の役割を確認していくことで、今後、さらに解釈が深まる可能性もある。藤原氏にはこの場を借りてお礼申し上げる。

Study of Nishikawa Sukenobu's "Genre Scenes in the Four Seasons"

Kitagawa Hiroko

"Genre Scenes in the Four Seasons" in the Chiba City Museum of Art Collection depicts the pleasures of Kyoto in each season. It has been featured in many exhibitions to date as a well-known work by Nishikawa Sukenobu, yet there has been up to now no detailed interpretation of all the scenes. This paper examines all the scenes and the appearance of the people portrayed.

At present, it is only the two works sharing the title "Genre Scenes in the Four Seasons" of the Chiba City Museum of Art collection and the Museum of Fine Arts Boston collection that can be confirmed as handscrolls by Sukenobu that are not Shunga (erotic art). The Museum of Fine Arts Boston scroll depicts a total of eight scenes, devoting two scenes to each of spring, summer, autumn and winter, with a high sense of independence of each scene. Also, it features 25 women, with three young men, so could be described as fundamentally depicting genres of women in the four seasons.

In contrast, the Chiba City Museum of Art scroll features numerous people, an entire crowd of 110 individuals, and is composed in a continuous flow through the seasons. Also, the scenes portrayed are not vaguely of inside a room or in the open air like in the Museum of Fine Arts Boston scroll, but are largely identifiable settings. The Chiba City Museum of Art scroll contains detailed depiction of the appearance of not only those enjoying the pleasures in Kyoto in each of the seasons, but also the men and women who worked there, and that forms a large difference.

I examine the picture scroll focusing on each of the scenes. They are spring's "Gathering at a Teahouse" and "Cherry blossom-viewing at Higashiyama", summer's "Catching Fish in Kamo River" and "Evening cool at Shijo Kawara", autumn's "Gion-machi Ghost Festival", "Moon-viewing at Ryozen", "Maple-viewing at Higashiyama" and "Matsutake Mushroom-gathering at Higashiyama", and winter's "Kitchen of Sumiya in Shimabara", "Amusements in a room at Sumiya" and "Playing in the snow in the garden at Sumiya". I also carry out identification, as far as possible, of the locations using contemporary geographies, illustrated guides to famous places, essays, etc.

At present, there is no other confirmed example of this kind of hand-painted picture by Sukenobu. We can assume that Sukenobu was able to paint the fine work since he was born and brought up in Kyoto, yet such hand-painted pictures did not prevail in Kyoto of that time. However, that is precisely why this picture scroll stands out, and can reveal to us its *raison d'être* as the Ukiyo-e, Floating-world Art, of Kyoto.

(Translated by Barbara Cross)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第二三号

二〇二一年三月三〇日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団

千葉市美術館

〒260-0803 千葉市中央区中央三丁目一〇番八
電話 〇四三―二二一―二三一一(代)

翻訳協力―バーバラ・クロス

ルイズ・アリソン・コート

制作―era

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.23

March 30, 2021

Edited and Published by
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba City, Chiba 260-0013 JAPAN
Phone. 043-221-2311

Translated by
Barbara Cross
Louise Allison Cort

Produced by
erA

ISSN 1343-148X